人生をかける仕事

弘前大学教育学部附属中学校　橋場　英太郎

「職人」という単語を聞くと、僕は何かを極めた人だとイメージします。例えば、陶磁器や和紙など、日本に昔からあるものを長年作り続けている人を職人と呼ぶと僕は思います。僕は職人たちは、完璧なものを作るために大変な修行をしたからこそ、プライドが高かったり、話し方が厳しかったりすると思ってこの本を読みました。

読み始めて最初に目に入った「僕は職人というのは職業じゃなくて『生き方』だと思っている。」という文に、僕はとても驚きました。僕は一人前の職人になるためには、技術と感覚を向上させることが大事だと思っていました。だから、なぜ職人とは技術や感覚、ではなく生き方なのか疑問でした。

この本のⅠからⅢまでは、職人たちの語録とそれに対する筆者の思いや感想が書かれています。そこを読むと、自分たちの大変さ、現代の技術や若い人への厳しい意見、普段身の周りにいる人のことなど、内容は十人十色でした。僕と共通点のある語録もいくつかありました。例えば「近頃の若い連中だって、きちんと説明してやれば、けっこう仕事はこなしてくれます。やあ、見事なものだと思うこともあります。〈好きなようにやってみな〉というと、何もできないのが不思議です。」という言葉です。僕が入っている野球部では、常に周りを見て、積極的に返事や行動をしています。これは日常生活も同じで、自分から行動する気持ちが無かったり、何をしていいか分からなかったりするときもあります。これからはより積極的に行動していきたいと思いました。職人の言葉が日常生活に関わるなら、職人は生き方を意識していることが分かりました。

僕がこの本の全体を読んで一番印象に残ったことは、職人に関わる法律と自然環境の問題でした。まず、法律の問題とは、経済産業省の計量法です。計量法とは、長さの単位を全てメートルにして、経済の発展や文化の向上を目指す法律です。つまり、日本で昔から使われてきた尺という単位を使った商品が取り引きできなくなったのです。これには職人や筆

者も反対していました。僕も昔ながらのものを作ったり、直したりするには、そのものと合った作り方、つまり尺などの単位を使うことが大事だと思いました。そうすることで文化が無くならず、さらなる文化の向上につながると思いました。しかし、この本の発行年は、今から二十五年前です。その間にも、法律によって無くなってしまった分野もあると思うと残念です。

次に、自然環境の問題とは、材料の減少です。理由は、国産の木材の減少や、ワシントン条約で禁止されたものが材料となっているからです。自然のものには限りがあります。それを人間は環境汚染などにより、さらに資源を減らしていて、これからさらに大変になると思います。この問題は、何にでも言えることだと僕は思います。

これから、職人と文化を残していくにはどうすればいいのでしょうか。先ほど言ったように、自然環境や法律の改善は必要不可欠だと思います。しかし、僕は他にも、消費者の行動も大切だと思います。現代では、伝統工芸品などは、お土産やプレゼントとして買われることが多いと思います。職人たちが作るものは高い。確かに機械で作るより、手間をかけて職人が厳選したものなので、高いのは当然かもしれません。でも、壊さずに数十年と使い続ければ一回使うあたりの値段は安くなっていきます。筆者は、職人が作ったものは使えば使うほど美しくなると書いていました。僕の家にあるブナコのごみ箱も、十年以上使っていくとツヤが増していました。輪島塗りの使い艶が有名だと思います。このように、長く使えるなどの価値の高さに気づいて使い続けることを、僕は大事だと思います。また、使い続けるには管理が必要です。僕はずっと使うことで、ものを管理する能力も向上すると思います。

この本には、職人の人数の減少の推移のグラフなど具体的なデータがありません。しかし、職人たちの語録で分かる職人たちの生き方や考え方は、修行を重ね、日々努力しているからこそ納得できることがたくさんあります。これからは、環境問題への行動を職人目線で考えてみることで、楽しく行動できると思います。また、ものの価値に気づけるように様々な情報から選べるようにしたいです。現実と向き合って謙虚に積極的に行動する。これが僕が職人から学んだ生き方です。